

（４）震源過程

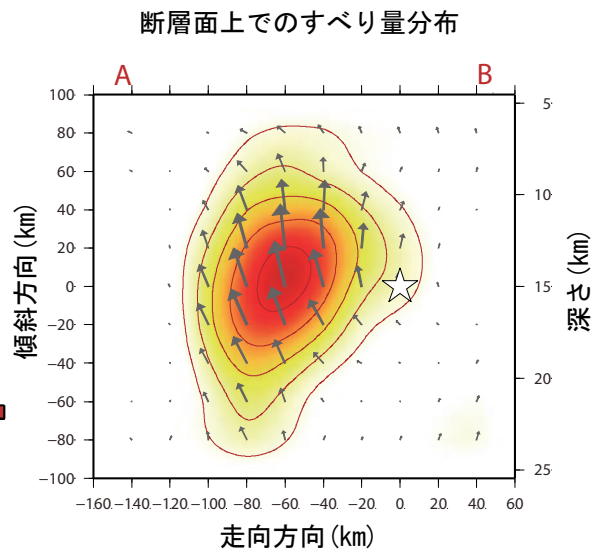
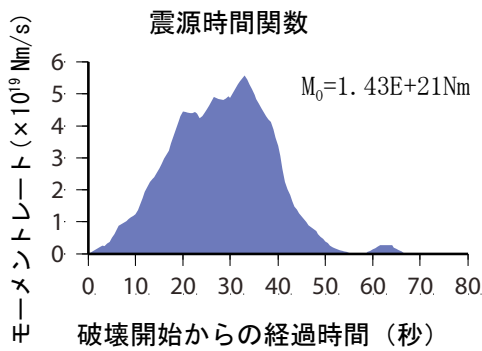
今回の地震について、米国地震学連合（IRIS）のデータ管理センター（DMC）より広帯域地震波形記録を取得し、遠地実体波を用いた震源過程解析（注１）を行った。

初期破壊開始点は、米国地質調査所（USGS）による震源の位置（28° 08.8′ N、84° 82.4′ E、深さ 15km）とした。断層面は、気象庁 CMT 解の 2 枚の節面のうち、北北東傾斜の節面（走向 299°、傾斜 6°）を仮定して解析した。最大破壊伝播速度は 3.0km/s とした。理論波形の計算には CRUST2.0 (Bassin et al., 2000) 及び IASP91 (Kennett and Engdahl, 1991) の地下構造モデルを用いた。

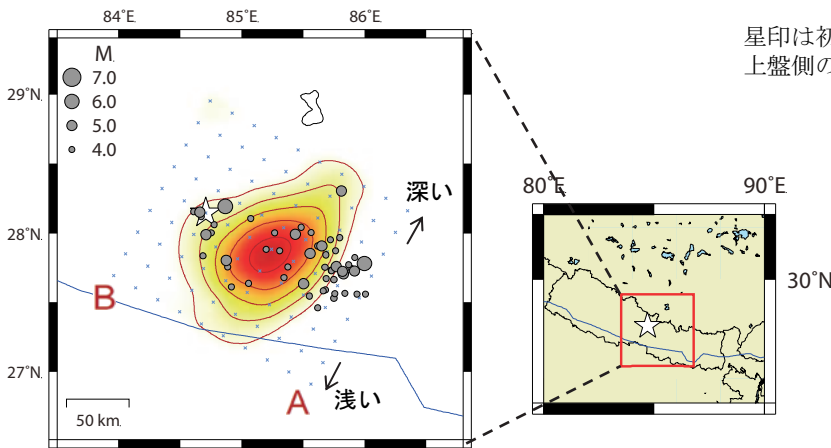
主な結果は以下のとおり（この結果は暫定であり、今後更新することがある）。

- ・ 主なすべり域の大きさは走向方向に約 120km、傾斜方向に約 160km であった。
- ・ 主なすべりは初期破壊開始点より南東方向にあり、最大すべり量は 5.3m であった（周辺の構造から剛性率を 30GPa として計算）。
- ・ 主な破壊継続時間は約 55 秒であった。
- ・ モーメントマグニチュード（Mw）は 8.0 であった。

結果の見方は、http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/world/about_srcproc.html を参照。

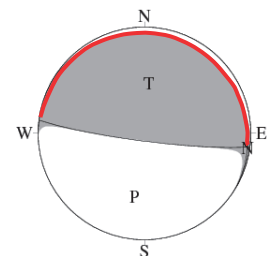


地図上に投影したすべり量分布



星印は初期破壊開始点、矢印は下盤側に対する上盤側の動きを表す。

解析に用いたメカニズム解 (気象庁 CMT 解)



断層面の設定に用いた節面（走向 299°、傾斜 6°、すべり角 112°）を赤線で示す。

星印は初期破壊開始点を示す。灰色の丸は本震の発生後 3 日以内の余震の震央を示す (M4.0 以上、USGS による)。青線はプレート境界を示す。

（注 1）解析に使用したプログラム

M. Kikuchi and H. Kanamori, Note on Teleseismic Body-Wave Inversion Program, <http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/ETAL/KIKUCHI/>